

牧師室から (2021.4.11)

私が洗礼を受けたのは中学校3年生の時であった。

父の仕事で、同じソウル市内ではあったが、通学するにはあまりにも遠かったので、2年になって転校することになった。

その移った学校がミッションスクールであった。編入であっても周りの学生や先生も優しく接してくれたので、転校による人間関係の苦しみはなかったが、好きだった前の学校への未練で、少しひねくれた学校生活であった。そのような私を特に優しく接して下さった方がチャプレンである先生であった。中年の恰幅が良い先生で、とても優しく落ち着いた性格の方であった。度々私をご自身の部屋に呼んで仕事を手伝ってくれとおっしゃいながら、さりげなく聖書の話をお聞かせして下さった。私はその先生に、「神様は全知全能でエバが禁止された木を食べることを知っていたはずなのに、なぜエバの見えるところにその木をおいて禁止したのか」また、「イエスの復活を信じることができない」と言いながら、いつも反論を探していた。

私の疑問に対するその先生の答えを覚えてはいないが、笑顔で根気よく一生懸命に対応して下さったお姿は思い浮かぶ。たぶん、何を言われても聞く耳を持っていなかった私には何にも頭に入って来なかったことでしょう。それだけではない。

「…人が死ぬと復活すると聖書には書いてあるけど、それを信じることは出来ない。人間は死ぬと土に帰り、全てが無になるのだ。そしてすべては終わる。…」と学報に書いた。ミッションスクールの学報にそのような内容の記載が許されたのは今でも不思議である。

そのように言いながらも、成績のために教会に通い、教会のお姉さんやお兄さんたちの後押しで、洗礼を受けることになった。受洗勉強をしてから問答があったが、その聖書の教えを理解することは出来なかったし、口では信じますと言いながらも心から信じていたとは言えない。しかし、何かに惹かれて、拒むことができない、自分が行くべき道であるという思いがあったことだけは覚えている。洗礼を受けたのにもかかわらず、高校を卒業してからは教会から離れていたが、再び教会に戻り、今は牧師になっている。

勿論、神様の御導きではあるが、多くの方々のお祈りと愛に支えられて今があることを改めて考えさせられる。イースターがくる度に、復活はあり得ないと生意気に言っていた自分の姿を思い出すと共に、その青臭い姿を見ておられた神様の愛の眼差しを感じる。

(鈴木善姫牧師)